

令和7年度 学校関係者評価報告書

資料1-1

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属東雲小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
教育課程・ 学習指導等	「東雲家族」「チーム東雲」(One Team, One Shinonome)としての自覚と主体的・協働的な教育活動	多様な学級形態を有する本校の特長を生かし、包摂的な教育実践の資質向上を図る。	縦割り活動, 学年活動をもとに日常的継続的に児童の情報交換を教職員間で行い共有する場を設ける。	教職員へのアンケートにより, 8割以上が他学年, 学級の具体的な児童の変容や成長を語る事ができる。	アンケートについてはこれからの予定。会議の後半の「子供のことで」を意識してよい姿を共有するようしたり, 全体の場でのよい姿を評価したりした。今後会議で一年間の学級経営の振り返りを行う事にしており, 各教員が自学級, 教科について成果と課題を共有する	C	何をどう達成できていないかこの評価にしたかをもっと明確にすることで具体的な改善案が出てくるものと思われる。ある程度できていて今後さらに充実していくのであれば評価としては上げて良いのではと考える。	B	具体的な指標を明らかにすることや取り組み自体を絞ることで, 教職員へも何をめざそうとしているのか, 今どういう状況なのかを示すことができる。具体的な成果指標を検討していく。
	ことば・こころ・からだを大切に学年・学級・学年経営を基盤とした児童どうしのよりよい関係の構築		学級・学年経営案に具体的な取り組みを盛り込み, 定期的なふりかえり改善していく。	学級・学年経営への具体的な方策の明記, ふりかえりから肯定的な成長の姿の評価を確認する。	長期休みの前等区切りごとに学年部で学年・学級経営について振り返りを行った。9割以上の学級で言葉や表現の取組が明記されている。今後形だけでなく評価の目的を確認する必要もある。	B	先生方が語る場があることは良い。成果としてどういう子どもたちの姿を通して評価するのかを共有する必要がある。	B	達成することが目的ではあるが, それを担任等が1人で考えたり取り組んだりするのはなく, 学校全体で取り組むことができるよう体制づくりを含めて示していく。
教育研究等	共生の視点で教科本来の魅力に迫るための教師の資質能力に関する研究の推進とまとめ	多様性と包摂性を希求する附属学校としてのミッションをふまえ, 研究の成果を研究会や書籍を通して発信する。	年間を通して8回の小中合同の全体会を開き「共生」の捉え方を共通確認すると共に計画的に研究を推進していく。	全教科等において指導案や基本的な考え方より, 「共生」の捉え方や教科で目指す姿を具体的に示す。	新研究テーマで「共生」を意識した取組を中学校卒業時を見据え, 連携して基本的な考えや実践につなげることができた。今後最終的なゴールや目的を共有し深化させていくと共に, 義務教育学校としての学校運営につなげるようにしていく。	B	中教審等で話題になっている多様な児童生徒の包摂, 意味・概念としての知識理解などキーワードがあるがまさに東雲が得意としているところ。先を見据えて取り組んでいってもらいたい。	B	義務教育学校への見直しをもちながら, これから求められるであろう資質能力等と東雲が大事にしてきたものとの整合性を明らかにし小中合同で取り組んでいけるようにする。
	複式教育の研究の推進と成果の発信		校内において複式授業の参観, 理論研修を通して共通理解を図ると共に授業公開座談会を開催し, ネットワークづくりの足がかりとする。	複式教育授業座談会を通して, 情報や課題の共有から参観者アンケートの記載に具体的な成果の表記を8割以上得る。	複式座談会の評価は8割以上が高評価で, 後日その成果を確認するオンライン座談会も行った。また, 複式学級の視察も後期だけで7回となり, 少人数指導や異学年との学習のあり方への関心が高い傾向にある。今後も内容を充実していく。	B	異学年の交流という点では, 縦割りやクラスターの今後のあり方にもつながってくると思われる。複式の指導のあり方も含め, 子どもたちが成長するためにどういう手立てが有効かなど, 話ができる良いのではないかな。	B	小学校の縦割りや中学校のクラスターの取組の関連等を整理し, 異学年交流やかかわりの良さを生かした集団づくりになるよう検討する。
社会連携・ 社会貢献活動等	大学や他団体, 地域社会からの要請に対する積極的な協力	小中連携や多様な学校形態を有する本校の特長を生かし, 大学や他団体, 地域社会からの要請に答え, 地域の教育力向上に貢献できるようにする。	講師派遣や視察の受け入れ, 調査などの協力, 外部研修への能動的な参加を行い, 他校の研究会等へも積極的に参加する。	大学との共同研究や視察の受け入れ, AR実地研究や調査協力などの実績を20件以上行うとともに学級や児童への影響や成果も確認する。	AR実地研修は延べ5名を受け入れ。実地演習や卒論データ収集, 他学部の研究協力など精力的に行った。調査などについては結果を児童や保護者へフィードバックすることで今後の参考とした。また, 公立の校内研修, 教育センターに教員, 複式などの講師で研修など行う。	A	事前の申し込みだけでなく, 突然の相談も含めできるだけ協力していく体制が整っている。質の高い実習や研修ができることは大きな特徴であり強み。	A	今後できるだけ大学や地域社会への要請に貢献できるようにしていくと共に, 受ける側にもメリットがあるようにしていく。
			本校への研究示唆となる他校の研修報告を年間3回以上行う。	各教科, 又は合同で年5回の視察を行い, 研究実践に示唆となる内容を報告した。今後は義務教育学校又は小中一貫教育の学校運営についての視察を小中で行い準備を進めていく。	他校の研究会や研修会に参加することは知見を広めるだけでなく今後の義務教育学校としてのイメージづくりにもなる。小中で継続してもらいたい。	A	小学校, 中学校共に他附属の義務教育学校や先進的な公立学校への視察を予算立てて行えるようにしていく。		

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。

令和7年度 学校関係者評価報告書

資料1-2

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属東雲小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
学校経営・ 安全管理等	多様性と包摂性を希求する安心安全な学校生活のための教育環境の整備	学校教育の基盤となる健康, 安全, 安心の確保及び附属学校としての使命遂行の観点から業務内容の精選を図る。	スペシャルサポートルームを運営し, 登校や入室に不安を感じる児童への支援を行う。	人的配置を行い不登校または登校困難な児童に対し, スペシャルサポートルームの利用を促し, 登校のきっかけや学力保証とする。	スペシャルサポートルームに人員を配置し, 学校生活, 学習におけるサポートを行うことができた。しかし, 教室に入りづらい, 学校に行きづらい児童も一定程度いることから, 今後はそのサポートも必要	B	多様性ということを考えると要因は様々ではあるが, 今後もサポートが必要な状況は続くと思われる。継続してより充実した取組にしていきたい。	B	サポートルームの運営に限らず, 児童の状況に応じて臨機応変に動けるよう人員を配置すると共に担任とともに取り組んでいるようにする。
	ICTの環境整備と効果的な活用		アプリの活用や研修を通して業務の効率化, 効果的な指導に生かす。	校務支援ソフトの更新等を利用し年間3回以上の研修を通して業務の効率化を図る。	校務アプリを更新し, 健康観察, 出席簿等の管理もパソコンで行うことができ, 効率化を図ることができた。	B	できるだけ効率化できるところは工夫をして進めて行ってほしい。楽をするのではなく子どもや教材と向き合う時間を確保できるようにしてほしい。	B	チェック体制も整えて効率的に業務を遂行できるようにしていくと共に, 児童や教材等に向き合う時間を確保できるようにしていく。
	教員自らの働き方の意識と健康管理		具体的な組織数値目標をあげ目標評価シートにその方策を記入する。	月42時間以内の超過勤務を組織目標にあげ, 80%以上の教員が達成する。	月42時間以内の超過勤務は数字を意識するだけでなく, 業務の簡素化, 効率化を図る上では有効。しかし仕事を進める上で「やりがい」や「こだわり」については課題	B	数字を達成することが目的ではなく元気で心身共に健康で児童生徒の前に立つことが目的。年休取得状況を調べることも1つの指標。	B	職員の健康管理には十分気をつけ, 1人に負担がかからないよう各学年, 校務分掌等の主任へも注意喚起を行うようにする。
教育実習	主体的・協働的に学び多様性と包摂性を希求する学部の教育実習及び教職大学院のアクション・リサーチの実現	多様性と包摂性を希求する次世代型の教育実習及びアクション・リサーチを開発, 実施する。	学級反省会の自主的な運営, 協議を行い児童理解の深化を図る。教職の魅力と価値を伝えることができるよう, 教員のつながりや協働の場を体感する。	教員と実習生, メンターとメンティーへのアンケートによる主体的・協働的な評価を90%以上にする。	実習生のアンケートから, 概ね満足している評価となった。複数で実習する良さや効果も記述に見られ, 時間を意識した指導や相談等上手く機能していた。体調を崩す, 発熱等による欠席が目立つ。体調管理などのサポートも今後必要。	B	実習生の指導に関しては限られた時間の中で, できる事を指導してきている。さらに教師としての仕事の魅力ややりがいを感じることができる指導でこれからも取り組んでほしい。	B	大学とも連携しながらより質の高い教育実習となるよう条件整備を行うと共に, 健康状態や体調面にも気をつけ, 無理なく最後までやりきれるようにしていく。

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。